

関西大学教育推進部は、伊丹市教育委員会のご協力のもと、大学間連携共同教育推進事業「〈考え、表現し、発信する力〉を培うライティング／キャリア支援」(以下、本取組と表記)の高大連携事業および広報活動の一環として、平成25年度より毎年、「考動力」作文コンテストを開催してまいりました。第3回となりました今年度は、高校生の部740作品(小論文部門597、ショートショート部門143)、大学生の部125作品(小論文部門123、ショートショート部門2)でした。多数のご応募、ありがとうございました。まずは、応募者ならびに関係各位に厚く御礼申し上げます。

ご応募いただいた作品は、内容においてもレベルにおいても大変幅広く、審査には多大な時間を要しました。審査は、本取組企画運営部会メンバーとライティングラボTA、さらに、教育開発支援センター(CTL)・センター長の田中俊也先生、神戸市立工業高等専門学校講師でありCTL研究員でもあります林田定男先生、教育推進部特任教員であり同じくCTL研究員でもあります山田嘉徳先生、CTL研究員の佐々木知彦氏、の合計36名で行いました。その結果、小論文部門で最優秀賞1作品、ショートショート部門で優秀賞3作品をそれぞれ選出するに至りました。

以下、部門ごとの講評を述べます。

【小論文部門講評】

小論文部門では、本コンテストが求める小論文を、「自分の意見を述べ、なぜそう言えるのかという理由を筋道立てて説明し、読み手を説得させる文章」と定義しました。テーマは、「選挙権、異文化コミュニケーション、少子化、環境問題、勉強」の語群より1つ以上を選ぶこととし、選んだ語をタイトルに含めることとしました。加えて、昨年度の応募作品にみられた剽窃の問題を考慮し、「他者の意見や調査データを最低1つ、必ず文章内に引用すること」という条件を設けました。

選考では、これらの募集内容をもとに、「資料の取り扱い」「自分の意見」「学術的な作法」の3つの観点を中心に各作品を評価しました。「自分の意

小論文部門

最優秀賞

「音楽を聴きながら勉強することの是非」

溝川智也さん(関西大学北陽高校2年)

見」では、文章を通して言いたいことが明確に書かれているかを評価し、「資料の取り扱い」では、その意見を述べるための客観的な根拠が用いられているかを評価しました。さらに、資料を引用するさいに守るべきルールなどを「学術的な作法」の観点で評価しました。

今年度の応募作品は、「型」にはまった文章が多く、内容も似通っていたという印象でした。何かの文章を真似すること自体は、全面的に悪いことではありません。しかし、深く考えずに参照した文章の言葉を入れ替えるだけでは、内容に深みがない文章になってしまいます。例えば、調査をしていないにもかかわらず「調査をした」、主張部分がないのに「～と主張したい」と書かれていたことなどが挙げられます。言葉の意味を精査せず用いているのは、読み手の心に迫り、訴えかけるような文章を書くことはできません。

今年度の応募作品にはこのような傾向が見られました。そのため、入賞作品は最優秀賞1作品のみとさせていただきます。みなさまには、今一度、上記の点を意識して小論文を書いていただきたいと審査員一同願っております。

それでは、入賞作品の講評を述べます。

最優秀賞の溝川さんの作品「音楽を聴きながら勉強することの是非」は、最終選考に残った作品の中でも、身近な関心から「問い」を立て、論文を引用しながら考察を深めていった点が高く評価されました。音楽を聴きながら勉強することのメリットだけでなくデメリットについても検討しており、そのうえで自分の意見を導く論理展開も見事でした。ただし、文体が統一できていなかった点を含め、文章表現には改善の余地があり、今後は読み手を意識した文章の書き方についてのさらなる研鑽が期待されると思います。

では、入賞作品と入賞者の喜びの声、および伊丹市教育委員会よりいただきました作品に対する講評をご覧ください。



【小論文部門最優秀賞】 音楽を聴きながら勉強することの是非

関西大学北陽高校 2年 溝川智也

現在、私たちは様々な側面で音楽と関わっている。これはどの年代についても言えることだろうが、特に10代から20代の若者は音楽と密接に関わっているのではないだろうか。実際、通学時の学生がイヤホンを耳につけて音楽を聴いている姿をよく目にすることはないだろうか。そんな学生が音楽を利用する場合は勉強にまで広がっている。川西・奥(2004)によると、若者がどんなときに音楽を聴いているか調査を行ったところ「勉強中」と回答した若者が42.1%であった。(川西・奥 2004, p.44-45) このように音楽を聴きながら勉強する若者、学生が増えているのはたして音楽を聴きながら勉強することは良いことなのだろうか。私は本小論文で音楽を聴きながら勉強をすることはいくつかの点に注意すれば良いことであると主張したい。

まずは音楽を聴きながら勉強することのデメリットから述べていきたい。1つ目として挙げられるのが、集中力の低下だ。音楽を聴くことと勉強することと2つの作業を同時に行うため当たり前のことだが集中力が分散し集中力が低下する。2つ目に考えられるのが、普段音楽を聴きながら勉強していると、試験などになったとき、音楽がないから集中できないなどといった問題が生じ、普段の勉強において試験のような環境で集中できるような力を身につけられないことだ。他にも音楽があると記憶力が落ちるなど音楽が勉強をする上で邪魔になってしまうということが分かる。

しかし音楽を聴きながら勉強することにはメリットもある。前述した内容と矛盾するのだが、集中力の向上がメリットの1つである。音楽を聴くことでテンションを上げやる気を出す

溝川さんの喜びの声

今回、最優秀賞に選考して頂き本当にありがとうございます。自分自身、話を聞いた時は寝耳に水でその後、しばらく驚きで状況が理解できていませんでしたが数日経って嬉しいという思いが溢れました。表彰されるといった経験がなかったので特別な思いでいっぱいです。今回私は音楽を聴きながら勉強することについて書いたわけですが、実際私も音楽を聴きながら勉強することが多々あり、その度に集中できていたり、余計に気が散ったりしたのでその是非について疑問が湧きました。そして調べ文章を書いていくなかで、音楽は状況に応じて適切に利用することで勉強の上で心強い味方になってくれるという結論に至りました。私はこの文章を通じ音楽の勉強への有効性を伝えるとともに、日々の勉強に対する姿勢を考え直すきっかけになってほしいと思います。最後になりますが改めて今回はとても貴重な体験をさせて頂きありがとうございました。

ことで集中力が向上するということがその理由だ。他にも騒音など周囲の環境が集中して勉強できない環境にある時に音楽を聴くことで周りの音を遮断して勉強できる環境をつくることのできるなどといったメリットがある。

このように音楽を聴きながら勉強することには多数のデメリットもあるがメリットもあるのである。では音楽を勉強の助けにするためにはどうすればいいのだろうか。まず1つに時と場合に応じた音楽を聴きながら勉強することだ。菅・岩本(2003)によると大学生にある計算問題を高揚的音楽を聴きながら解く人、抑鬱的音楽を聴きながら解く人に分け実験を行ったときどちらの場合も音楽を聴くことによって作業量には影響がなかった。しかし高揚的音楽を聴いている場合、計算問題を解くという作業に対して「いらいら」して「不快」に感じたが、作業時間は「短い」と感じたという結果が得られ抑鬱的音楽を聴いている場合は「落ち着いた」や「リラックスできた」と感じ、作業時間が「長い」と感じたという結果だった。この結果から音楽の種類によって、作業量に及ぼす影響はないが、作業に与える印象には違いがみられた。(菅・岩本 2003, p.30-34) この実験結果から分かるように、音楽の種類によって与える印象が異なり、作業時間や作業の種類に気をつけ、適切な音楽を選択すれば、勉強に対して良い影響を及ぼすのだ。

では具体的に適切な音楽というのはどのような音楽なのかというと、歌詞がある音楽やにぎやかすぎる音楽は、勉強開始時はテンションを上げるといった意味では効果的だが、長時間、音楽を聴きながら勉強する場合は、歌詞のない曲やクラシックなどの落ち着いた音楽が適切なのではないだろうか。

私はこれまで音楽を聴きながら勉強することのメリットとデメリットを述べた上でどうすれば音楽を聴くことが勉強に有効活用できるかを述べた。もちろん、音楽を聴かずに集中して勉強できるのであればそれが1番良い。だが「なかなか勉強する気にならない」や「勉強が長続きしない」といった悩みを持つ人には、音楽をあくまで道具として勉強の種類や時間に応じて音楽の種類を適切に選択し、自分の気持ちやモチベーションをコントロールする分には音楽を聴きながら勉強することは効果的で良いことだと思う。

参考文献

- ・川西孝依・奥忍(2004)『現代の若者と音楽』に関する調査 岡山大学教育学部附属教育実践総合センター編『岡山大学教育実践センター紀要』、第4巻、p44-45
- ・菅千索・岩本陽介(2003)「計算課題の遂行に及ぼすBGMの影響について—認知的側面と情意的側面からの

伊丹市教育委員会からの講評

スマートフォンに代表されるICTの著しい進歩により音楽を身近に、しかも安価で楽しめる時代背景のなか、若者らしいテーマでの小論文を興味深く読ませて頂いた。

作者が述べているように、なかなか勉強に手がつかないときに、心理学でいうところの「作業興奮」の一つとして音楽を利用するのも効用の一つであろう。また、計算問題での研究も紹介されているが、教育現場でも計算問題を解かせるときにクラシック音楽を取り入れているケースもある。以上は著者の主張するメリットの一部であるが、デメリットの一つとして、いわゆる「イヤフォン難聴」に触れても良かったのではないかと感じた。

こういったテーマでのディベートやアクティブラーニングも考えられる。議論や学習の端緒として、この小論文が活用されることを望む。

【ショートショート部門講評】

ショートショート部門では、本コンテストが求めるショートショートを「短編小説よりもさらに短い小説。小説としての構成がしっかりしており、話の展開に意外性のある文章」と定義しました。この定義に基づき、「ストーリー構成」「伏線とオチ」「描写力」「作文力」「オリジナリティ」の5つの観点から審査を行いました。ショートショートは、喜怒哀楽など何かしらの感動を読み手に生ませることが重要であり、そのために、伏線からオチにかけて読み手が想像できないような展開になっているかどうかを重視しました。

今年度の応募作品には、読み手を感動させる作品が全体的に少なく、慎重に議論を重ねた結果、最優秀賞は該当なしとしました。優秀賞に選ばれた作品は、映画や芝居のシーンのように場面をイメージすることができるかを問うた「描写力」や、言葉選びのセンスや語彙力を問うた「作文力」には優れていました。一方で、上述した「伏線とオチ」という点で、最優秀賞として選定するには例年に比べ物足りない

ショートショート部門 優秀賞

「悪魔」

「仮装の話」

「サンタの贈り物」

大村凌也さん（浜松開誠館高校3年）

佐藤理世さん（関西大学高等部1年）

吉川慶さん（関西大学高等部1年）

いところがありました。

それでは、入賞作品の講評を述べます。

大村さんの作品「悪魔」は、ストーリー設定や世界観にオリジナリティがあり、状況説明などの描写がわかりやすい点などは多くの審査員が高く評価しました。ただし、作品の「オチ」については、「意外性があって面白い」という評価と、「わかりにくい・不明瞭である」という評価に分かれました。その原因は、オチに向けての展開に表現不足な点があったためであり、この点を工夫できれば、より優れた作品になったのではないのでしょうか。

佐藤さんの作品「仮装の話」は、オバケの世界と人間の世界をうまく対比させている作品でした。ストーリー構成がおもしろく、加えて場面のわかりやすさなどの「描写力」も評価しました。しかし、作品の「オチ」につい

ては、「予想できるものであった」「もう少し深みのあるオチが欲しい」などやや物足りないという評価になりました。ストーリー構成や登場人物の設定のユニークさが評価されただけに、読み手の想像を裏切るようなオチを練ってほしかったところです。

吉川さんの作品「サンタの贈り物」は、主人公の心情がよく描写されており、優しく、温かさを感じさせる作品でした。しかし、それが逆にインパクトに欠けるという評価にもつながってしまいました。全体の流れの中で、主人公がおかれた境遇のコントラストをより明確に描写できると、結末でより深い感動を生む作品となったのではないのでしょうか。

それでは、入賞作品と喜びの声、および伊丹市教育委員会よりいただきました各作品に対する講評をご覧ください。

【ショートショート部門優秀賞】 悪魔

浜松開誠館高校3年 大村凌也

ある古びたアパートで一人の男が自ら命を断とうとしていた。丈夫な縄が天井からぶら下がっている。

「これで楽になれるかな。」

そうつぶやいて縄に首を通そうとした時、インターホンが鳴った。男は出るのをためらったが、最後に誰かに会うのも悪くないと思い出ることにした。玄関を開けると一人の男が立っ

ていた。特にこれといった特徴のない30代程に見える男だった。

「あの、ご用件は・・・。」
そう聞くと特徴のない男は、
「私、悪魔といます。」
「はあ・・・悪魔ですか。」

馬鹿馬鹿しいと思ったが、どうせ死ぬなら少しくらい面白い方がいいと思ひ、話を信じてみることにした。

「で、悪魔が私に何の用ですか。魂をもらいに来たんですか。」

「とんでもない。それは悪魔に対する偏見ですよ。別に魂を取りに来たのではなく、何か願いを叶えてさしあげようと来たのです。」

「何で悪魔が人の願い事を叶えるんですか。」

「確かに昔は魂と交換していましたが、なんといいですか、需要と供給のようなこと最近の人間は無理だと言うんですよ。」

「なるほど」

「ですから何でも一つ願いを叶えますので、あなたが死んだ時に魂を回収させてもらうシステムに変えたのです。」

「じゃあ何でもいいのですか。」

「はい。もちろんです。さ、いったい願いは何ですか。」

大村さんの喜びの声

今回このような賞をいただき、正直驚いています。この作品は「人間の物事に対する先入観」や「物事の本質」をうまく表現したいと考えて書きました。ちょうど書いていたのが入試の時期だったので、「試験」をテーマにしました。

私は学校の部活動で演劇部に所属しており、台本を書くことがあったので、テーマや表現したいことが決まればすぐに書けると思っていました。ところが、会話だけで成り立つ台本と違って、会話文以外の文章で世界観を表現しなければいけないところが思ったより難しく、新しい経験でした。作中にはないものの、なぜ悪魔試験を受けなければいけなかったのか等、登場人物の細かい設定も出来上がっていました。そこは読んでくださる方が、それぞれ違った読み方をしてくださると嬉しいです。

今回、優秀賞をいただけたことで、物語を書く自信ができました。これから周りの人に読んでもらって喜んでもらえるような作品を書いていきたいと思ひます。ありがとうございました。

少し考えるような素振りをして男は言った。

「私を悪魔にしてください。」

「えっ？それは・・・。」

「何でもいいと言ったのではないですか。」

「言ったには言ったのですが・・・。」

「受験番号 2010 番、君は悪魔試験不合格だ。もう一度頑張りなさい。」

「そんな・・・私のどこが駄目でしたか？」

「君には悪魔っぽさが足りない。これといった特徴がないのだ。」

「分かりました。もう一度勉強して

きます。」

そう言うのとぼとぼと出て行った。

「はあ、悪魔試験のためとは言え、人の姿でしかも自殺しようとしている奴を演じるのは疲れるものだな。」

するとインターホンが鳴った。

「受験番号 2011 番です。よろしくお願ひします。」

インターホンのスピーカーから聞こえた。

「さてと、もう一頑張りするとするか。」

そう言う男は縄に手をかけた。

伊丹市教育委員会からの講評

タイトルといきなりの「自ら命を絶とうとする男」という表現に思わず身構えてしまったが、読後感は一種のユーモア小説ともいえる作品である。悪魔の世界でも優秀な後進を育てるための学習があり、勉強成果を確かめる試験があるという発想も面白い。

自裁を装う男が実は「悪魔試験」の試験官という展開は、まさにこの部門で求められている「話の展開の意外性」を見事に達成している。

【ショートショート部門優秀賞】 仮装の話

関西大学高等部 1年 佐藤理世

やあどうも、こんばんは。吸血鬼です。

ああ、怖がらないでください。突然わけのわからないところに連れてこられて混乱しているでしょうが、あなたに危害を加えるつもりはありません。血も吸いませんよ。そもそも、男

の吸血鬼が人間の男の血を吸うなんて稀な事ですし。

本当ですよ、だから逃げないで、大人しく私の話を聞きましょうね？・・・よろしい。

御心配なさらず。私はあなたに少しお話をお聞きしたいだけです。ええ、もちろん、私の気が済めばちゃんとおご自宅へお送り致しますよ。

私はですね、所謂『オバケの世界』というところから参ったものでして、

そこには我々吸血鬼の他に、狼男やミイラ男などの所謂モンスターがおります。もちろん、日本の妖怪達もおりますよ。

あなた方人間の世界では、秋になると我々に仮装してご近所さまを驚かせに行くというイベントがあるんですよ。あれ、ちょっと違う？・・・ああなるほど、お菓子をくれなきゃ悪戯するぞ、ですか。主に子供たちが。なるほどなるほど。

実は、近年我々の世界で流行っているのも『仮装』なんです。あなた方のイベントを真似たものなんです。がね。・・・はあ？私たちがオバケに仮装したって仕方ないでしょう。私たちはあなた方人間に仮装するんですよ。あなた方がどれだけ不気味な我々に仮装できるか競い合うように、我々もどれだけ人間に近付けるかを競い合うんです。

あ、そんなの簡単じゃん、て思いましたね？結構大変なんです。牙をどうやって隠すかとか、尖った耳をどうやって丸くするかとか。

え？だから何なのかって？ああそうそう、本題を忘れるところでした。あなたに、仮装についてご指導いただこうと思ひまして。いやいや、我々の世界まで来いとは言いません。それでは約束が違いますからね。吸血鬼はきちんと礼を尽くす種族ですので！

それでですね、私の知り合いを件のイベントまで預かって頂きたいのですよ。仮装の勉強はもちろん、あなた方人間についての勉強も兼ねて。ああ、大丈夫です、ちゃんと安全で礼儀正しい者を厳正に選抜しますから。

仮装には興味ない？何を仰いますやら。あのね、何も調べずに、無作為にあなたに決めたわけじゃないですか。仮装が大好きなもの、化粧品社で研究員をなさっているのも、毎年巧みな特殊メイクとご衣裳で仮装パーティーに出ているのも、全部調べ上げましたからね。

佐藤さんの喜びの声

今回は、このような光栄な賞をいただくことができて、とてもうれしく思います。最初に「考動力」作文コンテストのための宿題が出たとき、実をいうと心底困りました。私は長い文章を書くのが苦手なのです。しかし、ものごとを理論立てて説明することよりは、自分の世界で作った想像を文章にするほうが好きだったので、ショートショート部門に応募しました。作品を書いた時期はちょうど、もうすぐハロウィーン、という時期だったからか、自然とハロウィーンが題材になりました。

次にまたこのような機会があれば、今度は小論文に挑戦してみたいと思います。もっと上手な文章を書けるように、これからも勉強をがんばりたいと思います。

家が狭い？・・・はっはっは、某駅前の高級マンションに住んどいて厭味ですか。ええ？

・・・コホン、失礼しました。とにかく、一週間だけ預かってください。できる限り優秀なものを寄越しますし・・・あ、もちろん男です。それに、何かあればすぐに私が飛んで行けるよう、手筈も整えます。

引き受けていただけますね？・・・ありがとうございます！

「では、行ってまいります」

「はい、頑張ってきて下さい」

そうして人間界にメイクなどの研修に出した男は、しかし二日目の夜には帰ってきた。

「えええー？まだ二日しか経ってませんが。ちゃんと学んできましたか？」

「ええ、それはもう・・・目から鱗でしたよ。人間は素晴らしい発想をしますね」

「それはよかった！って君、仮装は？」

帰って来る時は最高の仮装を見せるよう言ったのだが、彼はいつもの姿、つまり、吸血鬼の姿となんら変わらなかった。

「まあ聞いて下さい。僕だって、最初はきちんと学ぼうとしましたよ。でもね、見せられた化粧品の種類が、僕らが使うのと比べ物にならないくらい多かったんですよ。これは面倒だなんて顔をしたら、向こうが『そんな顔になると思いましたよ。そんな横着なあなたに良いことを教えてあげます。要は、中身が人間であれば外見はどうでもいいんです。つまりあなたはメイクをせずに、吸血鬼に化けた僕たちに化けることが出来ます！何て楽なんでしょう！というわけで研修終わり！お帰り下さいーい！』って。ね？素晴らしい発想でしょう？」

この素晴らしい屁理屈で彼はその年の仮装大会で見事優勝したが、次の年からこの方法はルール違反となった。

伊丹市教育委員会からの講評

この短編を本の「帯」風に紹介すると、「人間に仮装の対象とされた吸血鬼たちが逆に人間に仮装する大会を考え、一人の男を人間界にメイクなどの研修に送り出す。果たして男はどのような成果を持ち帰るか？」とでもなろうか。ユーモアたっぷりに展開されるストーリー、そして意外な研修成果に驚かされる。

昨年11月「ゲゲゲの鬼太郎」の作者水木しげる氏の他界や日本でも年々盛んになるハロウィンなどをバックに創作された物語は詭弁の危うさを寓話的に描いているともいえる。

【ショートショート部門優秀賞】 サンタの贈り物

関西大学高等部1年 吉川慶

「サンタクロースなんていないのよ……」

クリスマスの夜の街で、マチコはぼつりとつぶやいた。

十二月二十四日、クリスマス・イブの日、仕事を終えたマチコは、一人だとぼとぼと夜の街を歩いていた。向かう場所は家以外にない。

サンタクロースなんていない。事故で夫と娘を亡くし、一人ぼっちになったマチコには子どもたちに夢と希望を与えるサンタクロースは認めたくない存在であった。

思えば、うまくいかない人生だったな、とマチコは感じた。小説家になることが夢だったが、結局夢叶わず、あまり待遇のよくない会社に入社した。最近、小説の新人賞に応募してみたが、結果はよくないであろうとマチコは予感している。その上、大切な家庭も失ってしまったのだ。

マチコはつかれていた。朝起きては会社に行き、夜に帰ってきては寝るという毎日のくり返しの中で、マチコの中にたまっていくものは、倦怠感と虚しさだけである。

いっそこのまま空の星となってしまうのか、夫と娘のように。そんなことを考えながら一人、歩いた。「ハンカチ、落としましたよ」後ろから声がきこえた。

マチコは、自分のことだとは思わずに、そのまま歩いていると、後ろからやさしく肩を掴まれた。

「ハンカチ、落としましたよ」二回目の言葉でようやくきづいた。

「あ、すみません……」ハンカチを受け取りつつ、拾ってくれた人を見ると、二十代前半であろうか、長身の美青年である。

「……」なぜだろうか、青年はハンカチを渡した後もじっと黒い真珠のような瞳でマチコをみつめている。

「あの……」マチコが不審に思っていると、青年は少し苦い表情をして口をひらいた。

「あなた、あまり幸せそうではないですね」

「っ……」

一般的に見れば、青年は失礼な発言をした男だ。だがマチコには今の自分の状況を見抜いたこの男に唾然とするしかなかった。

吉川さんの喜びの声

このたびは「考動力」作文コンテストに優秀賞として入賞しましたことを、大変うれしく思います。今回の作文を書くにあたって小論文かショートショートか、どちらを書こうか考えた結果、自分は論文を書くのが苦手ですので、恐縮ながら書く人が少ないであろうショートショートを選ばせていただきました。今回の「考動力」作文コンテストでは、ショートショートは全143通、小論文を合わせますと全740通もの応募があったとのことですが、その中で3人しかいない優秀賞に選んでいただいたことは私としましてはとても光栄なことであります。今回の受賞はこれまでなんのとりえもなかった私に文章を書くという才能が少なからずある、ということを教えてくださいました。このような機会を用意していただいた先生方には、誠に感謝しております。ありがとうございました。これからも自己の向上に努めてゆきたいと思っております。

そんなに顔に出ていたか、とマチコが思っていると、青年は「少しお話しませんか」とマチコに提案してきた。

一体この男は何者なのだろう。だが、不思議と悪い男だとは感じない。すでにマチコにとってこの男は、ただハンカチを拾ってくれた人、ではなくなっていた。

マチコと青年は、港にあるベンチに座った。黒い海に街の光がキラキラと反射している。

「僕は三田と申します。数字の三に田んぼの田です」青年が名乗ったのでマチコも「私は木戸マチコです」と名乗り返した。

「あの……」マチコは素直に三田に尋ねた。

「私が幸せじゃないってどうして分かったんですか」

三田は少し微笑んで「そんなの見れば分かりますよ」と言い、その言葉に続けて、「実は、僕サンタクロースなんですよ」と言った。

いきなりなにを言い出すのだろう、三田とサンタをかけているのだろうか。まったく面白くないチャレだ、とマチコが思っていると、

「あなたはサンタクロースに何が欲しいと願いますか」と三田が尋ねてきた。

サンタクロースを信じないで生きてきた。今までの記憶が蘇ってきた。叶わなかった夢、失った家族。

もし、サンタクロースに願いを叶えてもらえるのなら

「幸せに……なりたい……」涙があふれた。今までの思いがどっとあふれた。

「そうですね。」三田が言った。「結局、幸せを求めない人間なんていないんですね」

なぜ、この男の前ではこんなにも素直になれるのだろう。だが、思いを全てぶちまけて、心が少し晴れた。

「あの……」マチコが札を三田に言おうとすると、すでに三田はいなくなっていた。

マチコは家へ向かった。三田と出会うことで、私は何か変わることができののだろうか。

家に着き、ポストを開けると、

「あ……」

小説の新人賞の結果が返ってきていた。開けてみると、入選の文字。

「……！」

今までうまくいかないことばかりだった。幸せになりたいと、心のどこかで思い続けてきた。

幸せになりたい。サンタクロースに願った思いは、マチコの人生をゆっくりと変えることになるのだろうか。

マチコは、自分の物ではないハンカチを握りしめて、少しだけ、ほんの少しだけ微笑んだ。

伊丹市教育委員会からの講評

この物語の主人公は事故で夫と娘を亡くし、ひとりぼっちになったマチコ。小説家になりたいという夢も叶わず、あまり待遇の良くない会社と家を往復する毎日をおくる。「幸せになりたい」という深層心理が彼女の心に想像上のサンタクロースを呼び込む。

人は思わぬストレスや不幸に見舞われる。これらの逆境から立ち直る精神的な力が昨今、特に注目を浴びつつある。この精神的回復力は心理学では「レジリエンス」といわれている。書物により元気をもらう人も少なくない。この作品もその一つであろう。

【編集後記】

入賞作品は以上です。ご応募くださった生徒のみなさん、ご指導くださった先生方に、改めて心より感謝申し上げます。今年度のコンテストでは、高校生への応募資格を全国に拡大しました。その結果、東海地方や関東地方の高校からも応募がありました。全国の高校生のみなさんが次年度以降のコンテストに応募いただけることを主催者一同期待しております。その一方で、講評でもお伝えしたとおり、小論文部門において全体的に似たような作品が多くなってしまったことや、ショートショート部門において盗用に相当する応募作品があったことなど、審査員として残念な気持ちになることもありました。当コンテストが高校生のみなさんにとって、書いた文章を発信できる場であるとともに、文章を書くさいのマナー・ルールを学ぶ場となることを切に願っております。先生方からも文章を書くうえでのマナー・ルールについて、ご指導くださいましたら幸甚に存じます。

最後に、入賞作品と喜びの声の掲載にあたっては、作者の意思を尊重し、こちらでの編集は最低限にとどめさせていただきました。掲載した文章は、ほぼ原文どおりであることを申し添えておきます。

平成 27 年度「考動力」作文コンテスト審査員

田中俊也 (教育開発支援センター・センター長、文学部教授)
中澤 務 (本取組責任者、文学部教授)
岩崎千晶 (教育推進部准教授)
小林至道 (教育推進部特別任用助教)
毛利美穂 (教育推進部特別任用助教)
西浦真喜子 (教育推進部特別任用助教)
林田定男 (神戸市立工業高等専門学校講師、教育開発支援センター研究員)
山田嘉徳 (教育推進部特別任用助教)
佐々木知彦 (教育開発支援センター研究員)
仁村万喜子 (学事局授業支援グループ)
竹中喜一 (学事局授業支援グループ)
宮田 将 (学事局授業支援グループ)

上田一紀 (ライティングラボ TA)	日並彩乃 (ライティングラボ TA)
内田龍之介 (ライティングラボ TA)	廣瀬有哉 (ライティングラボ TA)
小田直寿 (ライティングラボ TA)	福永健一 (ライティングラボ TA)
黒澤 暁 (ライティングラボ TA)	森 瑠偉 (ライティングラボ TA)
小林祐也 (ライティングラボ TA)	森川智晶 (ライティングラボ TA)
齋藤鮎子 (ライティングラボ TA)	山下裕樹 (ライティングラボ TA)
阪口紗季 (ライティングラボ TA)	山田和哉 (ライティングラボ TA)
施 燕 (ライティングラボ TA)	吉崎雅基 (ライティングラボ TA)
塩見 翔 (ライティングラボ TA)	吉田直人 (ライティングラボ TA)
中 祐介 (ライティングラボ TA)	吉田由似 (ライティングラボ TA)
中田恭平 (ライティングラボ TA)	米村恵吾 (ライティングラボ TA)
西川一二 (ライティングラボ TA)	渡邊朋希 (ライティングラボ TA)

平成 27 年度「考動力」作文コンテスト・表彰式の様子

平成 28 年 3 月 29 日（火）、関西大学千里山キャンパス第 1 学舎 1 号館 5 階のライティングラボ 1 にて、「考動力」作文コンテストの表彰式を行いました。入賞者のみなさん、ご参加くださりありがとうございました。

表彰式は、関西大学教育開発支援センター・センター長の田中俊也教授による表彰状と賞品の授与（高校生の部）、本取組責任者の中澤務教授による表彰状と賞品の授与（大学生の部）、お二人の先生方からの祝辞、伊丹市教育委員会からの講評の紹介と進み、最後に全員で記念撮影をして閉会となりました。

田中教授は、サプライズで高校生の入賞者のお二人にご自身の著書を贈られました。また、入賞した大学生とのやりとりを交えながら、大学での学びについて話され、お祝いの言葉を述べられました。入賞者の方々は、それを真摯に聞いておられました。

表彰式の様子は、関西大学のホームページのトップページ・トピックスにも掲載されました。
(http://www.kansai-u.ac.jp/mt/archives/2016/03/post_1887.html)



入賞者のみなさん、
おめでとうございます！



関西大学教育推進部・ライティングラボ

〒564-0073 大阪府吹田市山手町 3-3-35 関西大学第 1 学舎 1 号館 5・6 階

[Tel] 06-6368-1411 [E-mail] wlabo@ml.kandai.jp

[URL] <http://www.kansai-u.ac.jp/ctl/labo/>

Facebook、Twitter も更新中！